

NHK スペシャル

シリーズ原発危機

安全神話

当事者が語る事故の深層

2011年11月27日放送

元科学技術庁原子力安全担当 「事故は起こらないというのが、みなあつたんじゃないでしようか。そういうふうに決めないとしょうがない、原発を作るためには」

元科学技術庁原子力担当「絶対安全だということは、組織として原子力安全にかかわる者としては言うてはいけないことだったと思いますけれども、」

元通商産業省原発規制担当「(対策をとらずに) やってきたのだからかえなくてもいいのではないか。今まで不都合があったのか、なかったとすれば、変えなくてもいいのではないか」

東京電力 元副社長1 「こんな大きな地震が来たらどうなるんだろうと思った反面、すぐには起こらないんじゃないかと、明日あさって起こることではないでしょう、」

東京電力 元安全対策責任者「なんでそんなことをはじめから考えなかったと言われるでしょうけど、(対策が) 遅い、遅かった」

東京電力 元副社長2 「(事故の) 可能性があるということを外に向かって言うことは、なかなか勇気のいることだった。つまり、絶対安全だという、今で言う安全神話みたいなものがまかり通っていた」

米国から導入した初の原子力発電

立地審査指針 1964 万一の事故のもとで公衆の安全確保 原子力委員会→原子力安全委員会

原子力委員会元専門委員「ちょうど日本で原子力発電を始めようと言った頃に(指針が) アメリカで発表された。アメリカ版がありますから、それを日本的に・・・」「実際低人口地帯となってしまったあと、それに人が移ってくるのを防止する策もないということで、みなさんからみてもちょっといい加減だなと言われればそうだけれども、大事な思想というのは原子力発電というものをする以上は、それによって国民はメリットを受けるんだと」
アメリカでは：低人口地帯を義務付け、国土の狭い日本では低人口地帯への立地は困難→
深刻な事故は起きないことに

科学技術庁 重大事故が起きた時の避難が、日本の設置審査には盛り込まれなかった。

科学技術庁原子力安全局元局長(原発設置許可担当)「できないんだと日本では、避難なんかできないんだろうという話だったですね。施設ができたことによって退避させられるようなものだったら(原発は) いらんわいというようなこと、いくら何でもなつたんじゃな

いでしょうか。原子炉の立地なんか進まなかったんじゃないでしょうかね」

安全神話の誕生

立地審査指針等のなかに電源喪失に関するものあり安全設計審査指針 1977

電源喪失は 30 分程度。長期間の電源喪失は考慮不要となった

原子力安全委員会の議論 スリーマイル島の事故を経て見直し開始

原子力安全委員会・原子炉安全基準専門部会元部会長「なんで短時間の電源喪失に対して規定をしているのか、長時間に対して規定をしないのか、やっぱり日本では電源の信頼性を調べてみようということでワーキンググループを作ったのですね。」「大ざっぱに言って日本はアメリカよりも電源の信頼性は 10 倍くらい高いんですよ。原子炉の安全性に支障を及ぼさないと、そういう要求事項でよろしいという結論になった」

アメリカでは長時間の停電が頻発、日本では 30 分以内の停電がほとんど。

確率論で、

非常用電源の故障確率は 1000 分の一、二台使えばその二乗。100 万分の一で。外部リスクは入っていなかった。

東京電力 原子力本部元副本部長（元安全対策責任者）「相当な事故は起こりうる。ただしその確率は非常に小さい。それをどういうふうにとらえるかというのが一つの分かれ目と言ってはちょっと言い過ぎかもしれませんが、1 万年に 1 回の事象が明日起きたってちっとも不思議ではないのであって、そういうことについての考えが甘かったわけですよ」

東京電力・元取締役「全電源喪失はかんがえなくていいというのは頭にももちろんありました。なぜかという、電力会社として電源系統に自信を持っていたことがありますね。ああもう起こらないよと、そこで思考停止になったような気がする。そこでそれ以上もう考えなくていいよとなっていたような気がしますね」

安全神話の拡大

シビアアクシデントについては、電力会社の自主規制 ベント、注水など

国の規制として義務つけるか。国の監視の目

電力会社と通産省とのやり取り チェルノブイリ事故 1986 がきっかけ

元通産相原子力発電安全管理課元課長補佐「シビアアクシデントが起こると非常にリスクが高い、周りに被害を及ぼすということで、何とかこれを防がなくてはいけないということを考えてわけです。」

規制に抵抗する電力各社。そのとりまとめは東電.

東京電力 元副社長 2 「とても抵抗があったのは確かですね。現実的にそういうことが起こることはあまり考えられなかったし、そういうことで外向きに説明をやってきたわけですね。」「これはなかなか、これまで築き上げてきた地元との信頼関係だとか、皆さんが自分の中で築き上げてきた安全に対する考え方がある意味でぶち壊す話ですから」

通産省でも規制に対する慎重論 原発運転差し止め訴訟

シビアアクシデント前提に国が規制→原発の危険性を認める→裁判に負ける

元通産相原子力発電安全管理課元課長補佐「非常に確率が低い、発生する可能性が低い事象を本当に法に入れて規制するのか。シビアアクシデントを入れるということにすれば現行の規制が不十分だと言っていることにもなる。そういう意味では訴訟の観点からは非常に強い反対はありました。」

原子力安全委員会（科技庁、電力会社を含む）

原子力安全委員会元専門委員「電力会社だけデータを握っていて、規制する側はこっちが頼まなければ（データを）見せてもらえない。結局、こういうのはおかしいのではないんですかといろんなことを言うにしても、こっちが向こうに対抗できるだけの強力なデータを持っているわけではないから」

→原子力安全委員会は、規制としない決定。（自主規制）

原子力安全委員会・元委員長「規制を強化しさえすれば安全は向上するというのは間違いです。事業者がちゃんと責任を果たす、規制によらずにもその事業者自身が自覚して自らの責任を果たしてくれることがまず第一に必要なんだと、そういう結論に落ち着いた。それで、アクシデントマネジメント（事故対策）これは規制ではないと。」

東京電力福島第二原発元所長「だいたい、そういうのに対してお金を何百億もつけなくてはいけないのかって話になりますよね。起こるか起こらないかわからないことに対してそういうことが難しいんだ。原子力安全委員会が決めて、規制としてやりますよというのであれば、それは多分やったと思いますけど、自主的にやれなんていうとそんなもん。だから自主的というのではないんですよ。」

通産相原子力発電安全管理課元課長補佐「議論の中で欠けていたのは原子力安全というのは相当高度なんだと、したがって安全に対する日本の持っている力を全部結集して規制をしないと十分な規制ができないんだという視点が欠けていたのではないかと。非常に持っている力を100パーセント発揮できない体制を作ってしまった」

東京電力 元副社長 2 「絶対安全だという今でいう安全神話みたいなものがまかり通っている時だった。そういう意味で、おおびらに（安全対策を）検討することすらはばかられた。相当安全に対する防御の厚みは厚くしたというふうに思ってしまった。おおもとの

ところで、『いや、もっとこんなことがあるのではないか』という議論が不足していた」

34分

安全神話の崩壊

原子力安全委員会耐震指針検討分科会（2001－2006）

頻発する地震、地震の議論のみで、津波は地震随件事象として補足的な議論はわずか。

原子力安全委員会・専門委員（地震専門家）「大きな地震動それに津波、当然想定しなくてはいかん。どれくらいの範囲で起こることが決まれば現状では津波高は想定できると。だからそれで安全対策は考えるべきであると。」

原子力安全委員会・専門委員（津波専門家）「津波というのは地震そのものなわけですよ。決して随件事象なんていうね・・・海で起こる地震そのものといってもいいので、その辺の地震に対する根本的な認識が、原子力をやっている人の全体になかった、甘かった。」

耐震設計審査指針（2006） 津波の記述は具体性なし。→電力会社の自主規制

2008年に試算→国に報告せず。（仮定あり、→2011.3.7国に報告。

1938年塩谷崎沖地震 5.7mが想定→堤防は10mで十分となった。

気象庁地震調査委員会の指摘で、より大きな地震発生の可能性の指摘。明治三陸地震相当。
→10.2m

東京電力・元副社長1「これ本当だろうか。それからもしもこれを（外部に）言ったとすると、これは大変なことだということになって、地域の人たちにも知れることでしょうから、大変なことだと、そんなことがおこったら」

「直ちに発電所を止めてくれという話もあるでしょう。ですから、そういう大混乱が起こった可能性があるとして非常に危惧したでしょうね。こんな大きな地震が来たらどうなるだろうと思った反面、それを受けて何かやろうとしたときの、あまりにもたくさんいろいろな制約があることはすぐ見えてきて、その中で、**すぐに起こらないんじゃないかと、明日あさって起こることはないでしょうと、なんとなくもう少し時間かけて、議論するのを熟してくるのを待った**」

そして東日本大震災が起こった。

リスクを知らながら対策をしない電力会社

リスクに目を向けない国

東京電力・元副社長 1 「なんでこんなことが起こったんだろうと思ってそればかり考えましたね。われわれ世代はそれに対して何かできなかったのだからかと考えましたね。あんまりこんなことは起こってほしくないなと思っていることは、いつの間にか自分の心の中でそんなことはないよと、そんなことあるわけではないと、今までなかったんだと思おうとしたりね。」

通産相原子力発電安全管理課元課長補佐「神の国じゃないですけど、外国で起こった事故は日本では起こらないという立論に頭を使うというわけですよ。本当に起こらないのかという問いかけをするのではなくて、こういう条件だから日本では起こらないとやってしまう。」

東京電力原子力本部元副本部長「問題意識を持っていた人はいると思いますよ、あちこちにたくさん。それでも何か対策をとるかどうかが決めることは、そんなに簡単なことではないですよ。経済的な利益よりも安全対策のほうがよっぽど重要だというコンセンサス作れば、(対策をとるように) なると思いますけどね。」

Role Playing

電力会社役員

発電所所長

原子力安全委員会委員

国（通産省安全管理担当責任者，科技庁設置許可担当責任者）

国民（立地地域，電力消費地）